

湯ヶ原より

国木田独歩

青空文庫

うちやまくんそくか
内山君足下

何故なげそう急きふに飛とび出だしたかとの君きみの質しつもん問もんは御ご尤もつともである。
 僕ぼくは不幸ふかうにして之これを君きみに白はくじやう状じやうしてしまはなければならぬこと
 に立たち到いたつた。然しかし或あるはこれほくさいが僕ぼくの幸さいであるかも知しれない、たゞ
 僕ぼくの今いまの心こころは確たしかに不幸ふかうと感をじて居をるのである、これさいを幸さいであつ
 たと知しることは今こんご後のことであらう。しかし將このさき來きこれさいを幸さいであ
 つたと知しる時ときと雖いへども、たしかに不幸ふかうであるかんと感かんずるに違ちがいない。
 僕ぼくは知しらないで宜よい、唯ただ感かんじたかくないものだ。
 『こゝに一人ひとりの少女せうぢよあり。』小せう説せつは何いつ時つでもこふうんな風ふうに初はじま
 るもので、批ひ評やうか家は戀こひの小せう説せつにも飽あきくしたとの御ご注ちゆう文もん、

然し年若いお互の身に取つては、事の實際が矢張りこんな風
 に初るのだから致し方がない。僕は批評家の御注文に應ずべ
 く神様が僕及び人類を造つて呉れなかつたことを感謝する。
 去十三日の夜、僕は獨り机に倚掛つてぼんやり考へて居た。
 十時を過ぎ家の者は寢てしまひ、外は雨がしとく降つて居る。
 親も兄弟もない僕の身には、こんな晩は頗る感心しないの
 で、おまけに下宿住、所謂る半夜燈前十年事、一時和雨到心
 頭といふ一件だから堪忍たものでない、まづ僕は泣きだしさうな
 顔をして凝然と洋燈の傘を見つめて居たと想像し給へ。
 此時フと思ひ出したのはお絹のことである、お絹、お絹、君
 は未だ此名にはお知己でないだらう。君ばかりでない、僕の朋

ういううち なんびと いま このな
 友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穏
 かな響を傳へるかの消息を知らないのである。『こゝに一人の
 少女あり、其名を絹といふ』と僕は小説批評家への面當に
 今一度特筆大書する。

僕は此少女を思ひ出すと共に『戀しい』、『見たい』、『逢
 ひたい』の情がむらゝとこみ上げて來た。君が何と言はうとも
 實際さうであつたから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又
 僕が愛する者は唯だ此少女ばかりといふ風な感、情が爲て來
 た。あゝ是れ『浮きたる心』だらうか、何故に自然を愛する心は
 清く高くして、少女（人間）を戀ふる心は『浮きたる心』、
 『いやらしい心』、『不健全なる心』だらうか、僕は一念こゝ

およ 及ばば世の倫理學者、健全先生、批評家、なんといふ
 どうぶつ 動物を地球外に放逐したくなる、西印度の猛烈なる火
 わざん 山よ、何故に爾の熱火を此種の動物の頭上には注がざ
 りしぞ！

ぼく 僕はお絹が梨をむいて、僕が獨で入いつてる浴室に、そつと
 もつ 持て来て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿ふて散歩したこと
 おも を思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を思ひ、其笑顔を
 おも おも 思ひ、思はず机を打つて、『明日の朝に行く！』と叫べんだ。

きぬ お絹とは何人ぞ、君驚く勿れ、藝者でも女郎でもない、
 えびちやしきぶ 海老茶式部でも島田の令嬢でもない、美人でもない、醜婦で
 もない、たゞの女である、湯原の温泉宿中西屋の女中

である！ 今僕いまぼくの斯かう筆ふでを執とつて居をる家うちの女ぢよちゆう中ちゆうである！ 田あ

舎なの百ひやく姓しやうの娘むすめである！ 小田原をだはらは大都會だいとくわいと心得こころえて居ある田あ

なかつた

舎娘むすめ！ この娘むすめを僕ぼくが知しつたのは昨さくねん年の夏なつ、君きみも御存知ごぞんぢの如ごと

く病後びやうご、赤十字社せきじしやの醫者いしやに勸すすめられて二ヶ月間げつかん此湯原このゆがはらに滞た

いざい

在ありて居あつた時ときである。

十四日かの朝僕あさぼくは支度したくも匆々そこくに宿やどを飛とび出だした。銀座ぎんざで半襟はんえり、

かんざしそのむすめよろこ

簪かんざし、其他娘しなが喜かびさうな品しなを買かひ整ととのへて汽車きしやに乗のつた。僕ぼくは今日けふ

をんなよろこ

まで女をんなを喜かばすべく半襟はんえりを買かはなかつたが、若もし彼の娘あむすめに此等これら

しなやつ

の品しなを與やつたら如何どんなに喜よこぶだらうと思おもふと、僕ぼくもうれしくつて堪たま

らなかつた。

見榮坊みえぼう！ 世よには見榮みえで女をんなに物ものを與やつたり、與やらな

かつたりする者ものが澤山たくさんある。僕ぼくは心こころから此貧このまづしい贈物おくりものを我わ

があい
愛する 田舎娘に 呈上する！

夜來の雨はあがつたが、空氣は濕つて、空には雲が漂ふて居た。

夏の初の旅、僕は何よりも是が好で、今日まで數々此季節に旅

行した、然しあゝ何等の幸福ぞ、胸に楽しい、嬉しい空

想を懐きながら、今夜は彼の娘に遇はれると思ひながら、今夜

は彼の清く澄んだ温泉に入られると思ひながら、此好時節に

旅行せんとは。

國府津で下りた時は日 光雲間を洩れて、新緑の山も、

野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！ 電車が景

氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥ゆかしく、嚴かに、面を壓して

近いて來る！ 軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂ふて居る、

かもめと浪が砕ける、そら雲が日を隠くした！ 薄い影が野の上を、海の上を這う、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸な男とは思はなかつた。又決して厭世家たるの権利は無かつた。

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此處に住みたいといふことである。古い城、高い山、天に連らなる大洋、且つ樹木が繁つて居る。洋畫に依つて身を立てやうといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。

小田原から先は例の人車鐵道。僕は一時も早く湯原へ着きたいので好きな小田原に半日を送るほどの樂も捨て、電車

から下りて晝飯を終るや直ぐ人車に乗つた。人車へ乗ると
 最早半分湯ヶ原に着いた氣になつた。此人車鐵道の目的
 が熱海、伊豆山、湯ヶ原の如き温泉地にあるので、これに乗れ
 ば最早大丈夫といふ氣になるのは温泉行の人々皆な同
 感であらう。

人車は徐々として小田原の町を離れた。僕は窓から首を出
 して見て居る。忽ちラツパを勇ましく吹き立て、車は傾斜を飛
 ぶやうに滑る。空は名残なく晴れた。海風は横さまに窓を吹き
 つける。顧みると町の旅館の旗が竿頭に白く動いて居る。
 僕は頭を轉じて行手を見た。すると軌道に沿ふて三人、田舎
 者が小田原の城下へ出るといふ旅装、赤く見えるのは娘の、

しろく見えるのは老母らうぼの、からげた腰こしも頑ぐわん丈ちやうらしいのは老父おやぢさ
 んで、人車じんしゃの過すぎゆくのを避さける積つもりで立たつて此方こつちを向むいて居ゐ
 る。『オヤお絹きぬ！』と思おもふ間まもなく車くるまは飛とぶ、三人にんは忽たちまち窓まどの下した
 に來きた。

『お絹きぬさん！』と僕ぼくは思おもはず手てを舉あげた。お絹きぬはにつこり笑わらつて、
 さつと顔かほを赤あかめて、禮れいをした。人ひとと車くるまとの間あひだは見るみく遠とほざかつ
 た。

若もし同車どうしゃの人ひとが無なかつたら僕ぼくは地ぢ段だ駄だを踏ふんだらう、帽ぼうし子を
 投なげつけたらう。僕ぼくと向むき合あつて、眞ま面目じめな顔かほして居ゐる役やく人にん
 らしい先せん生せいが居ゐるではないか、僕ぼくは唯ただがつかりして手てを拱こまぬ
 いてしまつた。

言はでも知るお絹は最早中西屋に居ないのである、父母の家に歸り、嫁入の仕度に取りかゝつたのである。昨年さくねんの夏も他の女ぢよちゆう中から小田原のお婿さんなどなぶ黷られて居たのを自分じぶんは知つて居る、あゝ愈々いよくさうだ！と思ふと僕は慊いになつてしまつた。一口ひとくちに言へば、海も山もない、沖の大島おほしま、彼れが何だらう。大浪おほなみ小浪こなみの景色けしき、何だ。今いまの今いままで僕ぼくをよろこばして居た自然しぜんは、忽ちたちまの中に何なんの面白味おもしろみもなくなつてしまつた。僕ぼくとは他人たにんになつてしまつた。

湯原ゆがはらの温泉をんせんは僕ぼくになじみの深い處ふかところであるから、たとひお絹きぬが居ゐないでも僕ぼくに取とつて興味きようみのない譯わけはない、然しかし既すでにお絹きぬを知しつた後の僕ぼくには、お絹きぬの居ゐないことは寧ろ不愉快ふゆくわいの場所ばしよとな

つてしまつたのである。不愉快ふゆくわいの人車じんしゃに揺ゆられて此この淋さびし

い溪間たにまに送り届とどけられることは、頗すこぶる苦痛くつうであつたが、今いま更引さらひ

返かへす事ことも出で来きず、其日そのひの午後五時頃ごご、じゅうご、此宿このやどに着ついた。突とつ然ぜん

のことであるから宿やどの主人あるじを驚おどろかした。主人あるじは忠實ちゅうじつな人ひとであ

るから、非常ひじやうに歡迎くわんげいして呉くれた。湯ゆに入はつて居ゐると女ぢよちゆ

中ちゆうの一人ひとりが來きて、

『小こ山やまさんお氣きの毒どくですね。』

『何故なぜ?』

『お絹きぬさんは最も早う居ゐませんよ、』と言いひ捨すて、ばたくと逃にげて

去いつた。哀あはれなる哉かな、これが僕ぼくの失戀しつれんの弔詞てうじである！失戀しつれん

?、失戀しつれんが聞きいてあきれる。僕ぼくは戀こひして居ゐたのだらうけれども、

ゆめ 夢に、實に夢にもお絹をどうしやうといふ事はなかつた、お絹も
 ま 亦た、僕を憎くからず思つて居たらう、決して其以上の上のことは
 おも 思はなかつたに違ひない。

ところ そのよ 處が其夜、女 中 どもが僕の部屋に集つて、宿の娘も來た。

きぬ はなしで お絹の話が出て、お絹は愈々小田原に嫁にゆくことに定まつた

でう き 一條を聞かされた時の僕の心 持、僕の運命が定つたやうで、

いまさらなん 今 更何とも言へぬ不快でならなかつた。しからば矢張失戀

であらう！ 僕はお絹を自分の物、自分のみを愛すべき人と、何

つ ま 時の間にか思込んで居たのであらう。

みやげもの 土産物は女 中 や娘に分配してしまつた。彼等は確かに

よろこんだ、然し僕は嬉しくも何ともない。

翌よくじつ日は雨あめ、朝あさからしよぼくと降ふつて陰いん鬱うつ極つきまる天氣てんき。溪け

流いりうの水みづ増ましてザアくと騷さう々／＼しいこと非常ひじやう。晝飯ひるめしに宿やどの

娘むすめが給仕きふじに来て、僕ぼくの顔かほを見て笑わらふから、僕ぼくも笑わらはざるを得えない。

『貴所あなたはお絹きぬに逢あひたくつて?』

『可笑をかしい事ことを言いひますね、昨さくねん年ねんあんなに世話せわになつた人ひとに會あ

ひたいのは當あたり然まへだらうと思おもふ。』

『逢あはして上あげましようか?』

『難ありがた有たいね、何なに分ぶん宜よろしく。』

『明日あしたきつとお絹きぬさん宅うちへ來きますよ。』

『來きたら宜よろしく被おつ仰しやつて下ください、』と僕ぼくが眞實ほんたうにしないので

娘むすめは黙だまつて唯ただ笑わらつて居ゐた。お絹きぬは此この娘むすめと從いとこ姉妹どうしなのであ

る。

午後ごごは降り止ふんだが晴はれさうにもせず雲くもは地ちを這はふようにして
 飛とぶ、狭せまい溪たには益ます々く狭せまくなつて、僕ぼくは牢らうごく獄くにでも坐すわつて居ゐる
 氣き。坐敷ざしきに坐すわつたまゝ爲する事こともなく茫ぼん然やりと外そとを眺ながめて居ゐたが、
 ちらと僕ぼくの眼めを遮さつて直すぐ又隣家またちよりの軒のき先さきで隠かくれてしまつた者ものが
 ある。それがお絹きぬらしい。僕ぼくは直すぐ外そとに出でた。

石いしばかりごろくした往來わうらいの淋さびしさ。僅わづかに十軒けんばかりの温をん泉宿せんじやく。其外そのほかの百姓家しやうやとても數かずえる計ばかり、物ものを商あきふ家いへも準じゆんじ
 て幾軒いくけんもない寂せき寞ぼくたる溪間たにま！この溪間たにまが雨雲あまぐもに閉とぎざれて
 見みる物もの悉もつく光ひかりを失うした時ときの光景くわうけいを想さう像ざうし給たまへ。僕ぼくは溪
 流うに沿そふて此淋このさびしい往來わうらいを當あてもなく歩あるいた。流ながれくだつて行ゆ

くも二三丁、上れば一丁、其中にペンキで塗つた橋がある、其
 のあひだ間を、如何な心地で僕はぶらついたらう。温泉宿の欄干
 に倚つて外を眺めて居る人は皆な泣き出しさうな顔付をして居
 る、軒先で小供を負て居る娘は病人のやうで背の小供はめ
 そくと泣いて居る。陰鬱！ 屈托！ 寂寥！ そして僕
 の眼には何處かに悲惨の影さへも見えるのである。
 お絹には出逢はなかつた。當り前である。僕は其翌日降り出
 しさうな空をも恐れず十國峠へと單身宿を出た。宿の者は
 總がゝりで止めたが聞かない、伴を連れて行けと勧めても謝絶。
 山は雲の中、僕は雲に登る積りで遮二無二登つた。
 僕は今日まで斯んな凄寥たる光景に出遇つたことはない。

あしした 足の下から 灰色の雲が忽ち現はれ、忽ち消える。草原をわた
 る風は物すごく鳴つて耳を掠める、雲の絶間絶間から見える者は
 やまたやま 山又山。天地間僕一人、鳥も鳴かず。僕は暫らく絶頂の
 いしよ 石に倚つて居た。この時、戀もなければ失戀もない、たゞ悽
 うかん 愴の感に堪えず、我生の孤獨を泣かざるを得なかつた。
 かへり 歸路に眞闇に繁つた森の中を通る時、僕は斯んな事を思ひな
 がら歩るいた、若し僕が足を踏み滑べらして此溪に落ちる、死
 んでしまう、中西屋では僕が歸らぬので大騒ぎを初める、樵
 まやと 夫を憐ふて僕を索す、此暗い溪底に僕の死體が横つて居る、東
 うきやう 京へ電報を打つ、君か淡路君か飛んで来る、そして僕は
 や 焼かれてしまう。天地間最早小山某といふ晝かきの書生

は居ゐなくなる！ と僕ぼくは思おもつた時とき、思おもはず足あしを止とどめた。頭あたまの上うへの眞ま黒くろに繁しげつた枝えだから水みづがぼたく／＼落おちる、墓はか穴あなのやうな溪たに底こでは水みづの激げきして流ながれる音おとが悽すこく響ひびく。僕ぼくは身みの髪けのよだつを感かんじた。

死人しにんのやうな顔かほをして僕ぼくの歸かへつて來きたのを見みて、宿やどの者ものは如何どんなに驚おどろいたらう。其その驚おどろきよりも僕ぼくの驚おどろいたのは此この日ひお絹きぬが來きたが、午後ごゝまた又また實じつ家かへ歸かへつたとの事ことである。

其その夜よから僕ぼくは熱ねつがでで今日けふで三みつ日かになるが未まだ快はつきり然しない。山やまに登のぼつて風かぜ邪ぜを引ひいたのであらう。

君きみよ、君きみは今いまの時じ文ぶん評ひやう論ろん家かでないから、此この三みつ日かの間あひだ、床とこの中なかに呻しん吟ぎんして居ゐた時とき考かんがへたことを聞きいて呉くれるだらう。

戀は力である、人の抵抗することの出来ない力である。此
 力を認識せず、又此力を壓へ得ると思ふ人は、未だ此
 力に觸れなかつた人である。其證據には曾て戀の爲めに苦み
 悶えた人も、時經つて、普通の人となる時は、何故に彼時自分
 が戀の爲めに斯くまで苦悶したかを、自分で疑がう者である。則
 ち彼は戀の力に觸れて居ないからである。同じ人ですら其通り、
 況んや曾て戀の力に觸れたことのない人が如何して他人の戀の消
 息が解らう、その樂が解らう、其苦が解らう?。
 戀に迷ふを笑ふ人は、怪しげな傳説、學説に迷はぬがよい。
 戀は人の至情である。此至情をあざける人は、百萬年も千
 萬年も生きるが可い、御氣の毒ながら地球の皮は忽ち諸君を

吸ひ込むべく待つて居る、泡のかたまり先生諸君、僕は諸君が此不可思議なる大宇宙をも統御して居るやうな顔構をして居るのを見ると冷笑したくなる僕は諸君が今少しく眞面目に、謙遜に、嚴肅に、此人生と此天地の問題を見ても貰ひたいのである。

諸君が戀を笑ふのは、畢竟、人を笑ふのである、人は諸君が思つてるよりも神祕なる動物である。若し人の心に宿るところの戀をすら笑ふべく信ずべからざる者ならば、人生遂に何の價ぞ、人の心ほど嘘偽な者は無いではないか。諸君にして若し、月夜笛を聞いて、諸君の心に少しにても『永遠』の佛が映るならば、戀を信ぜよ。若し、諸君にして中江兆民先生と

どうしゆ 同一種であつて、十八里零圍氣を振舞はして満足して居るなら
 ば、諸君は何の權威あつて、『春短し何に不滅の命ぞと』云
 うたひと 々と歌ふ人の自由に干渉し得るぞ。『若い時は二度はない』
 しやう と稱してあらゆる肉慾を恣まゝにせんとする青年男女の自
 由に干渉し得るぞ。
 うちやまくんそくか 内山君足下、先づ此位にして置かう。さて斯の如くに僕
 こひそのもの には戀其物に隨喜した。これは失戀の賜かも知れない。明後
 日に僕は歸京する。

をだはら とほ とき 小田原を通る時、僕は如何な感があるだらう。

小山生

青空文庫情報

底本：「定本 国木田独歩全集 第二巻」学習研究社

1964（昭和39）年7月1日初版発行

1978（昭和53）年3月1日増訂版発行

1995（平成7）年7月3日増補版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：鈴木厚司

校正：mayu

2001年11月7日公開

2004年7月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

湯ヶ原より

国木田独歩

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>